

消費のための労働、労働力をつくる労働、 人の尊厳を守る労働

1・ケア労働とは、どういふ労働なのか

□□

保育や教育、医療や介護など、人の発達や生活を直接支える労働が、まとめて「ケア労働」と呼ばれるようになってきました。きっかけは、それが人々のくらしに欠かすことのできない大切な労働であるにもかかわらず、それにふさわしい評価がなされていないことへの注目でした。低賃金、そのための人員不足、その結果としての労働条件のさらなる悪化という悪循環も指摘されています。あわせて、その労働の多くが女性によって担われており、賃金の性別格差を生む大きな要因となっていることも大問題

です。

ここではこれらの問題を掘り下げて考えるために、ケア労働とはどういう労働なのかを、主に経済学の角度から考えてみます。その労働の一部は家庭内でも行なわれていますから、これへの社会的評価の見直しは家事労働の再評価にもつながりうるものです。

2・そもそも労働とは、人間と自然 の物質代謝を制御するもの

□□

労働はものをつくるもの——とは、限りません。工場で自動車をつくるのは労働ですが、診療所で患者の胸に聴診器を当てるのも、トラックでコンビニ

神戸女学院大学名誉教授

いしかわ
石川 やすひろ
康宏

に商品を運ぶのも、町の中華屋でお客さんの注文をとったり、餃子を焼いたりするのも労働で、保育所で赤ちゃんのおしめを替えてあげるのも労働です。それぞれはぜひぶん違った行動（手や足や頭などからだの動かし方）をとり、ちがった役割を果たしますが、しかし、どれもが人間の大切な労働です。この問題を掘り下げていくと、カール・マルクスという人が書いた『資本論』の次のような言葉に突きあたります。

「労働は、まず第一に、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である」(②310「原192」注)。

ここに出てきた「物質代謝」というのは、もともとは生物学や生理学の世界で、生き物がからだの外から何かを取り込んで、自分に役立つものを吸収し、いらぬものを外に吐き出す——そういう活動を意味した言葉です。人間も、自然からたとえばリンゴをもぎ取り、食べて、分解して、必要な栄養素を吸収し、いらぬものを排泄するなど、まったく同じことをしています。ただし、マルクスがここで

行なっているのはもう少し視野を広げてのお話で、それは次のようなことがらです。

人間は自然から食べ物を得るだけでなく、山に生えている木を切り倒し、地面に埋まっている石油を掘り出し、それらを人間の生活に必要なものにつくり変える。これが生産です。先の生き物の話でいえば、外から何かを取り入れ、吸収できる形に分解したり合成したりという段階です。次に、人間はつくったものを、全国のスーパーやコンビニなどを通じて手に入れ、実際に使用します。消費するということです。生き物の話でいうと、ここが栄養素の吸収の段階です。そして、最後に人間は使い終わったものを廃棄し、自然に返還します。家庭や工場のゴミを集めて燃やし、害のないものにして土に埋めたり、海に投棄したりするのです。ここは生き物だと外に吐き出す排泄の段階です。この廃棄がうまくできないと人間は自分で自分の首をしめる環境破壊を引き起こしてしまいます。

こうしてマルクスは、人間が自然とのあいだで行なう生産・消費・廃棄のそれぞれの活動の全体を、広く「労働」と読んでいます。ものをつくるだけでなく「内労働」が縮小し、「料理」など「消費のために必要な家族労働」が労働者たちから奪い取られることになった(③693-4「原416」)。

そこで「子どもの世話や授乳」のために労働者は「代わりの人」を雇うようになる。「裁縫やつぎあてなど」「家庭の消費に必要な諸労働」も「既成商品の購入によって補われなければ」ならなくなり、「家事労働の支出の減少」に「貨幣支出の増大が対応」するようになる(③695「417」)。

ごらんのようにマルクスは、料理や裁縫など家族のために家庭の中で行なわれる労働を「消費のために必要な労働」と位置づけています。生産と廃棄のあいだにおかれた、生き物が必要な栄養素をしっかりと吸収する段階、人間社会でいえば生産物の役立ちをしっかりと享受する段階に必要な労働ということとです。農家が生産したニンジンやジャガイモの栄養やおいしさを、あますところなく活かすには、それにふさわしい料理が必要で、大きくなる子どもに衣服のサイズを合わせ、寒さから身を守るために穴をふさぐなど、衣服や布をできるだけ無駄なく効率的に消費するには、裁縫という労働が必要だとい

労働ではなく、生産したものを消費するのに行なう活動や、いらなくなつたものを廃棄するための行動も、どれもが人間の生活に不可欠な労働であるといふのです。

注——『資本論』からの引用は基本的に新日本出版社の『新版・資本論』から行なっています。②は第2分冊、310はそのページ数を示しています。他の『資本論』の翻訳書にも、原書(ドイツ語版)のページ数を書いたものがありますので、ここでは原192としてそれも書いています。

3・ケア労働は、消費のために必要な労働

では、この様々な労働の中で「ケア労働」はいったいどこに位置づくものでしょう。これについても、マルクスは興味深い分析を行なっています。たとえば、こんなふうです。

資本主義での機械の登場は人間の肉体労働を軽減し、それまで家庭に閉じ込められていた女性や子どもを、低賃金労働者として経済活動の現場に引っ張り出した。その結果「家族自身のための自由な家庭

わけです。

なるほど、そう言われてみれば、赤ちゃんにミルクを飲ませる場合にも、ミルクとお湯の量やお湯の温度の調整、哺乳瓶の殺菌、乳首のやわらかさの選択、1度に飲ませる量や飲ませる回数の判断など、粉ミルクやお湯や哺乳瓶といった生産物をよりよく消費するには、適切な知識に裏付けられた大人の労働が必要になってきます。

このような角度から考えると、保育だけでなく、介護や教育、医療などもふくめて「ケア労働」は介護用品や教材、医療器具や薬剤などそれぞれに必要な生産物的確な消費を可能にし、それによって人の発達や生活を直接支える役割を果たすものといえそうです。

さらにマルクスが、次第にそれが家族以外の「代わりの人」に任せられるようになるとしている点も重要です。当初は賃金が発生しない無償の家事労働としてのみ行なわれていたケアが、保育士や看護師など賃金と引き換えに行なわれる有償の労働に発展したということです。こうした経緯のために、特に歴史の早い段階では、ケア労働者には女性の比率が高

らを自分で行なう場合にも、たとえばゴハンをつくる労働は、自分の労働力を再生させる準備となりま

す。マルクスは、人々が忙しくなって誰も家事労働ができなくなると「既成商品の購入」が増えると言っていました。仕事帰りにラーメン屋に寄ったり、コンビニ弁当を家で食べるなどは、消費のために必要な労働をお金で買っているということになります。

こうして労働力を日々生産することが必要なのは、労働者本人だけではありません。資本主義が何百年もつづいているのは、労働者が一代だけで終わらず、つねに次の世代が準備されてきたからです。労働者家庭では、専業主婦も毎日の家事労働に必要な労働力を生産せねばならず、子どもたちも将来、どこかではたらくのに必要な労働力——知性と体力——を形成していかなければなりません。

このように家族全員の労働力の再生と形成を支えるケア労働は、家庭の中の家事労働としても行なわれ、また保育所や学校などではたらく専門の労働者によっても行なわれます。

この点にかかわってマルクスは、医療や教育も労

くなりしました。またその後、マルクスの時代よりもケア労働の専門性はずっと高くなりましたから、専業主婦のいる家庭でも子どもを幼稚園に通わせるなど、有償のケア労働の領域はずっと広がっています。

4・ケア労働は、人間の労働力をつくる労働

マルクスは「ケア労働」にかかわって、もうひとつ大切なことをいっています。的確な消費のための労働は、それを消費する人間自身の労働力をつくる「生産」の労働でもあるということです。

労働力というのは、人のからだの中にある、労働に必要な肉体的・精神的な能力のことです。「疲れた、もうはたらけない」と夜遅くに家に帰った人たちが、翌朝にはそれなりに元気を回復し、職場に向かつていくことができるのは、食べ物や風呂や布団や、時には栄養剤や薬も消費して、寝ているあいだに労働力を回復しているからです。その消費を準備するのは主に家庭内のケア労働です。単身者がそれ

動力を生産する労働なのだとはつきり書いています。

全商品世界は「労働能力」（労働力）とその他の商品に分けられるが、その中で「労働能力を形成し、維持し、変化させる：サービス」「たとえば『産業的に必要』であるかまたは有用であるかするかぎりでの教師のサービスや、健康を維持し、したがってすべての価値の源泉である労働能力そのものを保存するかぎりでの医師のサービスなどは：労働能力そのものを生みだすサービスであり、こういうサービスは、この労働能力の生産費または再生産費のなかにはいって行く」「医師や教師の労働は：労働能力の生産費のなかに、はいって行く」と（1861—63年草稿、「資本論草稿集」⑤193）。

遊具や教材や食材などを効果的に消費するための専門的な労働を通じ、やさしく、強く、かしこい子どもを育てることは、保育士や教員の意図にかかわらず、将来の優秀な労働力を育てる意味と役割をもつわけです。ただし補足しておけば、その労働力の持ち主が資本の命令に従うだけの人となるか、あるいは、よりよい社会をつくる意思と知恵をもった人

となるかは、教育の内容に大きく左右されます。

5・ケア労働は、すべての人の尊厳を守る労働

コ

子どもたちやはたらきざかりの大人については右のようなことがいえるかも知れないが、もうはたらくことのできなくなった高齢者や、ケガや病気のために、また障害をもつためにはたらくけない人たちへのケアはどういう意味をもつか。最後にこの問題を考えておきます。

歴史を振り返れば、生まれたばかりの資本主義では、労働力をもたない人間は大切にされませんでした。ケガ人や高齢者はクビになって終りとされたのです。その先は本人の自己責任という世界でした。そんな中で労働者は、人は自由だけでは生きられない、国家によるくらしの支えが必要だとする社会権の思想を發展させ——それはマルクスが称賛したパリ・コミューンのたたかいかいにも見られました——、これにもとづく公的な社会保障制度を生みだします。この変化がケア労働を、労働できない者をふく

め、あらゆる個人の尊厳を守るものへと發展させました。

ですから、この労働は直接、公務員が行なったり、また民間労働者が行なう場合にも、公的助成を得て行なうものがほとんどなっています。こうした思想の發展により、ケア労働は労働の対象となる子ども、高齢者、障害者、患者等自身の意思を尊重して組み立てられるものへと変化するようになり、また学校教育の内容も国より個人を主人公とするものへ大きく変わり始めます。

日本国憲法も「すべて国民は、個人として尊重される」「国政の上で、最大の尊重を必要とする」(第13条)、「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」(第25条)となっています。しかし、社会の実態はこの理念に遠く及ばぬものにとどまっています。これらの理念の実現を本気で求めるなら、各種制度や施設の充実、ケア労働者の処遇の改善はどうしても必要で、そのためにはケア労働者自身の取り組みと、これに共鳴する市民の力を一つにあわせていくことが必要です。